
ボクとハル

いのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクとハル

【Nコード】

N7203X

【作者名】

いのり

【あらすじ】

ある日ボクの学校にやってきたのはとてもきれいな転校生だった。変わらない日常に現れた小さな変化。

少しづつ、少しづつ僕らの日常は変わっていく。

ひとつめ

それは、特に何もなかった日常に訪れた変化だった。

「今から転校生を紹介する。入っていいぞー。」

担任の言葉と共に、入ってきた彼の第一印象は「綺麗」だった。

「はじめまして、大樟オコノギハルです。よろしくお願いします。」

「大樟はオコノギご両親の仕事の関係で日本に帰国したそうだ。

みんな仲良くしてやってくれ。席は…そうだな、一番後ろを使ってくれ。」

ハルは、はいと言うとニコツと笑顔を浮かべてその席へと向かった。

すれ違いざまに彼と目があったとかそんなのはきつと気のせいだと思いつながら。

*

「みい。」

「晃。どしたの？」

名を呼ばれボクは声の主の名前を呼んだ。

みい、というのはボクのあだ名だ。

クラスの人たちや先輩はほとんどみいかみっちゃんとボクを呼ぶ。

「昼飯食べようぜ。今日、担当じゃないだろ？」

「うん。」

「よしっ。屋上行こうぜ、魁人カイトもあとから来るように先に言っ
たし。」

「おっけー。」

晃アキラはボクのクラスメイトの一人。仲良くしてくれるとていいやつだ。

ここ天下原高校に入ってからずっと同じクラスで、高校1年の時からつるんでる。

とにかく元気な奴だ。部活も運動系だから、すごくうらやましい。

ボクは手にお弁当を持って、晃アキラの後についていく。

先ほど晃アキラが担当というやつはボクが普段からやらせてもらっていることだ。

ボクは放送部に所属しており、お昼の放送の担当をしている。

入部してすぐに部長にすすめられて始めたのだが、正直ボクなんかがやってもいいのかわからない。

高3になった今では、ボク自身が部長となり後輩にほとんど任せて

いる状態なのだ。
後輩に活躍の場を与えてやりたいと思い、お昼の放送からは辞退しようとしたのだが……。
ものすごい勢いで止められたので、今は週2のペースで担当させてもらっている。

「二人とも遅い。」

「許せよ、魁人^{カイト}。しょうがないだろー。」

「ごめん。魁人^{カイト}。」

「みいがそういうなら許す。」

なんだよそれー、と晃^{アキラ}が言っているがそれを気にせずにはボクはいつもの場所へいく。

フエンスにもたるように座り、ふうつと一息ついた。

二人もボクの近くへきて座る。

「そういや、さ。」

「なんだよ、晃^{アキラ}。」

「あいつってどんな感じなの？」

「あいつって誰のことだよ。」

「あいつって言ったらあいつしかいねえじゃん。大樟^{オコノギ}。」

魁人^{カイト}は興味なさげにああ、とつぶやいた。

「みいとかさ、席近いからなんかないのかと思って。」

「席が近いのはお前らも一緒だろ。見ての通り特に何も無いよ。」

「だよなー。大体女子に囲まれてるだけだし。」

卵焼きを一つつまんで口へ運ぶ。

うん、なかなかおいしい。

「俺は興味がないからな、別にどうだっていい。」

「ま、それはそうだよなー。んじやいいわ。」

結局何が話したかったのかよくわからない。

でも、晃^{アキラ}が彼を気にしているのはわからなくはない。

彼はあれ以来毎日のように女子に囲まれている。

帰国子女でドイツと日本ののハーフとくればそうなるのも仕方ないのだろう。

ま。

ボクには関係ない話だ。

ボクは弁当を片付けて、フェンスごしにグラウンドを眺める。

下に見えたのは、中庭のほうで女子と共に昼食をとっている彼だ。

「そう、ボクには関係のない話なんだ。」

「みい、なんか言ったか？」
「ううん。」

ボクは少しはにかんで、お弁当箱を手に持った。

「教室戻ろう。もうすぐ終わる。」

そう、ボクには関係のないこと。

ふたつめ

「ねえねえ、大樟君オコノキは何が好きなのー？」

「帰国子女ってかっこいいよねー！」

「好きな子とかいるの？」

転校して早々、始まったのは予想通りの展開だった。

女子に囲まれて質問攻めにあう毎日だ。

丁寧に答えていくと、女子は余計によってくる。

きにかけてもらえるのはうれしいのだが、こつも周りに女子がいきるとやりにくい。

7

チャイムがなり、またあとでねーっと言いながら女子は離れていく。

俺はふう、とため息をついて空を見上げた。

*

昼休み。

再び女子たちに囲まれ、ともにお昼を食べることになった。

彼女たちには任せてしまおうと思ひ、ぼーっとしていると綺麗な声が聞こえた。
ふと気になり声の方へ顔を向けると茶髪の少しやんちゃそうな人が黒髪の人に話しかけていた。
どうやら綺麗な声の主は黒髪の人のはづらしい。

「どうしたの？大樟^{オコノキ}くん。」
「ん、あーいや。綺麗な声が聞こえたなーと思って。」

そついいながら俺が彼らのほづに目線をやると、女子の一人はあはつと口をついてた。

「あー、みつちゃんかー。」
「みつちゃん。いい声だもんねー、いつも放送楽しみだし。」

「みつちゃん？」

「あー、あそこの二人の黒髪のほうの子ね。」
「みつちゃんは今放送部でさー、めっちゃ声がきれいなんだ！
去年とかは先輩とかに気に入られて毎日お昼の放送担当してたんだけど、さすがに今年はそれはないみたい。
聞きたければ明日を待てばいいと思うよー。明日みつちゃんの担当だし。」

女子たちは楽しそうに”みつちゃん”のことを話す。
彼は俺の席に近いから多少は観察対象に入っていた。

いつも彼らとしゃべってる様子を見ているけどとても楽しそうだった。

そして、どこか懐かしいものを感じていた。

気のせいなのだとどこかで思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7203x/>

ボクとハル

2011年10月19日13時22分発行